新今昔物語

第29話

大東ふるさとカルタに見る地域遺産⑯

「羅漢さん　わが親の顔　どこにある」

「羅漢」とは、「阿羅漢」の略称で、阿羅漢とは煩悩をすべてなくし最高の境地に達した人のことを指します。狭い意味では自己の悟りを得た最高の聖者のことを言い、その修行の途中を「阿羅漢向」、到達した段階では「阿羅漢果」と言います。小乗仏教（自己の悟りを求める考え）では仏弟子の最高位とされていますが、大乗仏教（他人を救おうとする考え）では衆生（生きとし生けるもの）の救済を目指す菩薩の下におかれています。

羅漢像では、近年修復された野崎観音（慈眼寺）の十六羅漢も有名ですが、特に市域で知られるものとしては、諸福1丁目の勝福寺の五百羅漢があります。

勝福寺は、山号が水月山で曹洞宗のお寺です。十一面観音を本尊とし、慶長元年（1596）に創建されたと言われており、墓地には室町時代の天文15年（1546）、19年（1550）、永禄2年（1559）、10年（1567）の銘の刻まれた一石五輪塔なども残されています。また、市指定の本堂がある諸福天満宮の宮寺でもありました。

以前には羅漢堂があり、500体に至る木造の羅漢像が並べられていて「羅漢寺」とも呼ばれていました。江戸時代に、先祖を供養するために遠近を問わずさまざまな地域の人々が寄進したもので、大阪、京都はもちろんのこと、遠く小田原藩と書かれた木札も見られます。また、羅漢像の表情はさまざまで、寄進者が親の顔に似せて寄進したとの話もあります。

明治18年（1885）、淀川の大洪水でお堂と共に多くが流出してしまい、現在では座像の135体と立像の16体を残すのみとなり、本堂の鴨居などに安置されています。

（生涯学習課）

勝福寺

鴨居に安置された木造羅漢像

新今昔物語

第30話

大東ふるさとカルタに見る地域遺産⑰

「蓮根の穴を数える子どもたち」

河内地域の平野部は、古来から湖沼が広がる湿地帯でした。そこに蓮が自生していた様子や人々との関わりは、古い記録からうかがい知ることができます。

―クサカエノ　イリエノハチス
ハナバチス　ミノサカリビト
トモシキロカモ―

「古事記」にみえる赤猪子が詠んだ悲恋の歌です。日下江の入り江に咲く蓮のように今が盛りの若い人がうらやましい、という意味ですが、この歌からは、花盛りの蓮の様子が想像できます。

また、蓮の素晴らしさは、清少納言の「枕草子」の中でもたたえられています。

―蓮葉、よろづの草よりもすぐれてめでたし。―

すなわち、蓮の葉は数あるどんな草よりもすぐれて素晴らしい、と表現されています。

同じく平安時代の法典「延喜式」には、河内国から蓮を貢進したとあり、すでに河内地方の特産品が蓮であったことが読み取れます。

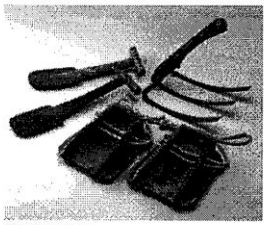
さらに時代は下って江戸時代、大東市域では諸福村と新田村の庄屋たちが、蓮年貢の免除を願った書状を確認できます。水害によって蓮が腐って年貢を納めることができないため、百姓たちは年貢を次の年まで待ってほしいと願い出ました。

大東市内の平野部は低湿地帯のため、蓮根栽培には適していましたが、たびたび水害に遭い、当時の人々の暮らしは不安定だったようです。それでも蓮根は米の数倍、収入が望めるため、新田や御領といった平野部では、昭和40年ごろまで盛んに栽培されました。

今となっては、河内全域で見てもごく小規模の蓮根畑を確認できるのみとなりました。

蓮根掘りの道具は、歴史民俗資料館の常設展示室で見ることができます。

（大東市立歴史民俗資料館）



蓮根掘り道具
備中鍬（右上）・田下駄（右下）
手鋤（左上）